ギアチェンジ

月見里 彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギアチェンジ

【Nコード】

N9983P

【作者名】

月見里 彗星

【あらすじ】

陸上部副部長である僕は、気が向いたら部活に顔を出す反幽霊部員。

そんな僕が徐々に部活に顔を出すと、何をどうしたのか気付いたらタイムトライアルが始まっていて……

「今日は部活に出るの？」

僕の視界に、一つに結びあげられた黒髪が映り込んだ。

部長だ。四限終了のチャイムと同時にやって来た彼女は弁当箱を僕の机に置き、開口一番そう言った。それから、僕の手前の席に腰を下ろす。

「どうだろうね？ 雨が降るかもしれないし」

「今日はとっても天気いいわよ」

「体操服を忘れたかもしれないし」

「確か今日、あなたのクラスは体育あったんじゃない？」

「……と、とにかく。分からないな、今のところ」

「暫く出てなかったのだから、たまには出て欲しいものね。……副部長でしょ？」

溜め息を吐く彼女 我らが陸上部部長様の横顔に視線を送る。

美術品のように整った顔立ちに、絹のように艶やかな黒髪のポニーテール。制服のスカートからはスラリとした脚が伸びていた。

個人的にはもう少し胸があれば完璧なのだが、スレンダー……と言っただろう。十分すぎる程の美人さんだ。ちなみに、少し怒りっぽいのが玉にキズ。

「……ん？ なに？」

僕の視線に気付いたのか、部長は微かに首を傾げた。

それに合わせて、彼女のポニーテールもさらさらと揺れる。

「いや、最近の日中関係についてちょっとね」

「はいはい。どうせあなたは日中関係なんて毛ほどにも思っていないでしょ」

「失礼な。美味しい中華が食べられなくなるのかなあ……くらいには考えているのに」

「……………全く」

部長は呆れたように呟いた。

「あんたは、やれば出来るんだからちゃんとやれば良いのに」

「……………」

それは 買い被りすぎだ。

僕はそんなに出来た人間じゃない。少なくとも、部長が思ってるよりかは、だ。

「ちゃんと、ねえ。僕はいつもそのつもりだけど？」

「ふふっ、そう言っと思っただわ」

部長はそう言っって微かに笑みを浮かべ、机に置いた弁当箱を引き寄せた。

「じゃ、お弁当食べよっか。今日のお弁当は割と自信作なのよ。…

…一口食べる？」

「へえ。それじゃあ、一口貰おうかな」

部長の手作り弁当か。そいつは楽しみだ。

もちろん、僕は迷わず頷いたのだった。

「あれ？ 本当に来たんだ」

「それは酷くないですか、部長」

放課後。僕が部室に顔を出すと、部長は驚いた表情を浮かべた。

自分から来て、と頼んだと言うのに……………この分なら部活を休む理由に『部長が苛めるから』を追加しても文句は言えまい。

「いや、私がちょっと言っただくらいで来るなんて珍しいと思って」

「ま、今日はそんな気分だったんだよ」

「……………そんな所だとは思っただけど」

「オマケに少しやる気ときた」

「悪いモノでも食べたの？」

「だとしたら部長のお弁当のせいかな」

そう言って、僕は一口どころか結局半分ぐらい貰ったお弁当の味を反芻する。

上手く出来たと自負するだけあって、味の方は申し分なかった。実際のところ、今だってお弁当のお礼も兼ねて部活に出てるぐらいだし。

「何よ、私のお弁当が悪いモノだとも言うの？」

「いやいや。出来れば毎日食べたいくらいだ」

「言ってなさい。……別に大したものでもないわよ」

部長は少し顔を赤らめ、コホン、と咳払いを一つ。

照れ隠しをするかのように声を出して部員を集めると、ミーティングを始めた。

恐らく、今日の練習内容の説明とかその辺だろう。ホワイトボードにキュッキュと音を立てて部長が文字を書いていく。ふと部室を見渡すと、ホワイトボードの隣、無粋に置かれたロッカーの側面が視界に映り込んだ。過去の先輩達のモノだろう。いくつかの落書きが残されていた。

『絶対全国っ！』

『いや、まずは関東だろ』

『落ちつけ。まずは都大会に行っただからだ』

『天使ちゃんマジ天使』

『とりあえず楽しんでこーぜ』

思わず苦笑が漏れた。

……ああ、クセえ。これを書いたヤツらはきつと、走るのが好きで好きで、走る事に一生懸命だったんだろう。……そういう人種だったんだ。

……僕が走る事に対して一生懸命じゃないのと同じように。

「で、今日の練習は男子長距離が九十分ジョグ。それから」
目があった。部長はじい、と全てを見透かすかのような視線を寄

越す。

それから、にんまりと笑うと。

「やめた！」

そう言い放った。

次いでホワイトボードに書かれた練習メニューに大きくxを書き
なぐる。

「今日は気分が乗らないから、タイムトライアルTTをやりましょう」

「へ？」

「何だか今日は長い距離走るのは面倒くさいのよね。丁度見たいテレビもあるし」

「いや……っ！」

「だから、今日はTT。単なる競争をやりましょう」
思わず立ちくらみがしそうだった。

……な、何て部長だ。気分が乗らない？ 見たいテレビがある？
そんな理由でしつかり考えられたメニューを止める訳がない。何
せ、メニューを考えたのは部長。彼女は、僕とは違う人種なのだか
ら。

どう考えても裏がある。いや、考えなくても、だ。

「さ、善は急げ。そうと決まったらさっさと始めましょう？ アッ
プは各自、今から……そうね、一時間後にロードレースコースのス
タート地点に集合よ」

僕を含め、困惑する部員を尻目に彼女は、ばちり、とウインクを
投げてよこしたのだった。

ロードレースコース。3キロ程の学校の周りを走るコースだ。
体育祭の目玉競技、ロードレースで使われるコースであることから
その名で呼ばれている。

学校が丘にある関係からかアップダウンが激しく、陸上部ではT

Ｔに使用される事は余りない。……が、ある程度の体力と戦略を必要とする事からたまに使用されるコースだ。

そして……

「はぁ……はぁ……はぁっ！」

そのＴも既に半分近くを走破していた。

僕の前を走るのは後輩二人。ちらりと確認するが、まだまだ余裕そう　と、言うか本気で勝ちを取りに来てるのか。

『副部長に勝った人は、なんと副部長がなんでも奢ってくれるそうです！』

……くそ。あの部長のヤツ、余計な事を言いやがって。

走りだす直前の部長の言葉に、思わず舌打ちが漏れた。

お陰で、そこまで乗り気じゃ無かった奴らまでがつついて来たじゃないか。

ホントに、溜め息が出そうだ。

基本的に、部長はこんな訳のわからない事を言わない。たいていこう言ったイマイチ意図の掴めない事をする時は要注意。確実に何かを企んでいる証拠だ。

……おまけに部屋を出るときに寄越したウイंक。どう考えても標的は僕じゃないか。

「……くそっ」

毒づき、前へと視線を向けた。距離は……十五メートル程だろうか。下り坂に入ってから、ジワジワと差を広げられていた。

たんたん、たんたん。軽やかな足音も、だんだんと遠くなっている。

……ま、仕方ないさ。所詮練習。別にこれに勝てばインターハイな訳でもなし。

そんな必死になってアイツらに勝つ必要だつてない。

……だから、別に負けても、さ。良いんじゃないかな。

それに、ほら。脚もちよつと痛いし。調子も良くない。最近、部活にも出てなかったからな。体力が落ちてるんだよ。おまけに肺も痛い。心臓は今にも破裂しそうだ。うん。だから……

負けても仕方無い。

「何しよぼくれて走ってるの？」

「んなっ！」

突如背中に衝撃が走った。思わず息が詰まる。

誰だ、思い切り張り手を張ったのは。

……いや、そんなの聞くまでもない。こんな練習中に人の背中を張り倒そうとするのは一人に決まってる。アイツ以外あり得ない。

「ったく、何すんだよ。部長」

「何すんだ、じゃないでしょ。アンタこそそんなやる気の無い走りして……何してんの？」

「……はあ？ 誰がやる気無いつて？」

「腕の振りが小さい。地面を蹴る力も最悪。腋が開いてる。……他にも言おうか？」

「……ち、調子が悪いんだよ、今日は。最近は何活にも出てなかったし」

「『楽しんでこーぜ』」

「……え？」

「アンタは今、楽しんで走ってる？」

「な！」

彼女はそう言い残すと、「お先に」と呟いて僕を置いて走り去って行った。

『楽しんでこーぜ』？

……楽しんで、ね。全くもってそんな事は無かった。
気付けば言い訳を考えて、妥協して。そんなの、楽しいハズが無
いじゃないか。

何時からだろう。言い訳を考える風になったのは。
何時からだろう。走る事を楽しめなくなったのは。

ああ。馬鹿らしい。

少し走るのに負けたぐらいで。腐って、やる気なくして。
確かに、陸上は才能の占める割合が多い競技だ。短距離の方なん
て八割が才能と言っても過言ではない。長距離だって、いつだって
勝つのは『才能』があつて尚且つ『努力』をした奴だ。俺みたいな
凡人が幾ら努力したつてそんな奴には勝てない。

けど、それは『楽しむ』ことに何か関係があるのか？
ごちゃごちゃ考えてくだら走つて。

俺は、何で楽しむことを忘れていたんだろう。

……やめだ。いったん、言い訳を考えるのをやめよう。リセット
だ。

「……ふう」

息を、吐く。言い訳を丸めてゴミ箱に放り込むと、肩の荷が下り
たかのようにスツと楽になった。余計な力が体から抜ける。

そしてそれと同時に……僕は思い出していた。

部室のロッカーに書かれたあのくさい言葉。

『とりあえず楽しんでこーぜ』

いつからあるのかも分からない、誰が書いたのかも分からなかつ
た言葉だ。

……そう、アレを書いたのは僕だ。まだ、この学校に入ったばかりで、やる気に満ち溢れた走るのが大好きで堪らない人種だった僕。早い奴に憧れて、一番最初にゴールに駆けこむ事だけを考えていた。……そこには確か、部長も居たはずだ。

「……確か、今月ちよつと財布がピンチだったよな」

思わず呆れた声が漏れた。ホントにアホだ。部長も、僕も。

ちよつと試合に負けたくらいで腐って。そんな俺の面倒を部長は見て。

ホントに、僕も部長もアホだ。

今は、あの時みたいに走るのが大好きで大好きで堪らない人種じゃあない。

でも、さ。楽しむぐらいは、してもいいんじゃないかな！

僕、じいつ、と前を見据えた。部長とは三十メートル。後輩とは五十メートル、といったところか。そして、コースはもう大分終盤だ。

とはいえ、まだ大きな上り坂が待ち受けている。

だとするならば、ここから無意味に仕掛けても一番最初にゴールに駆けこむのは難しいだろう。さすがにそこまでは甘くない。自分の残りの体力と、差から考えると

「坂の手前でギアをチェンジだ」

決めた。後は、それまでに少しでも良いから差を詰める。

僕は、ギアを少しだけ上げながら思わず笑みが零れるのを感じた。

部長の背中が少しずつ大きくなっていく。 ああ、これだ。この感じ。

自分で戦略を考えて、そして、抜き去る

「お先に」

部長を抜き去りながらさっき部長に言われた言葉をそっくりそのまま返す。チラリと見ると、彼女は微かに笑みを浮かべていた。

曲がり角を曲がる。もう少しで、最後の難関である上り坂に差し

掛かるだろう。

僕は緩む頬をどうにか引き締めようとしながら、力強くアスファルトを蹴った。

やはり、頬は緩んだままだった。

(後書き)

初めまして。山月見慧星です。

この小説家になるうに投稿するのは初めてです。宜しく願いします。

ではっノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9983p/>

ギアチェンジ

2011年1月7日14時55分発行